えむえむっ！～M体質な兄と苦悩する弟～

仮面カンサー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
えむえむっ！～Ｍ体質な兄と苦悩する弟～

【Ｎコード】
Ｎ７６７７Ｌ

【作者名】
仮面カンサー

【あらすじ】
この物語は、Ｍ体質、ドＳ、男性恐怖症、女装、白百合、美少女にコスプレをさせて写真を撮る変人、ロリコン、マッドな科学者、ブラコン、息子に恋する母親、様々な変態、奇人が織り成す超ドタバタ学園ラブコメディー？をノーマルな視点から支える一人の男子高校生の苦悩の日々を淡々と書いた作品です

この作品は『えむえむっ！』にオリジナル主人公を加えた作品です。
過度な期待はしないでください

※この作品は九割が変態でできています

プロローグ（前書き）

えむえむっ！始めちゃいました

更新は不定期です

※この小説は私がスランプの気晴らしに書いた小説なので過度な期待はしないで下さい

プロローグ

プロローグ

「ブタロウ！覚悟しなさい！」

「ちょっ！い、石動先ぱゲフゥ！」

今、俺の目の前で一人の冴えない男子高校生と小柄な女子高生が命懸けの鬼ごっこをしている

「ブタロウよけるな！これは治療なのよ！」

「ど、どこが治療ですか！こんなの下手したら死にますよ！」

女子高生がバットを振り回しながら男子高校生を追いかける

リアル鬼ごっこである

「影久！助けてくれぇ！」

今、俺に助けを求めた男子高校生――――

名前は砂戸太郎　（さど・たろう）私立桜守高校の一年生で俺の双子の兄である。そして『遺伝子レベルのM体質』をもった駄目人間である

「影久！邪魔よ！どきなさい！」

今、俺の兄を殺そうとしていた女子高生――――――

名前は石動美緒(いするぎ・みお)この部屋、第二ボランティア部の部長で俺と太郎の一つ上の先輩である。ちなみにこの人は正真正銘、本物のドSなんだけど本人に自覚は無い。

「すみません美緒先輩。すぐにどきます。」

「なっ!?影久!兄を裏切ったな!」

俺は兄の言葉を無実して安全な所まで待避した

「おっ、今日もやってるな。」

第二ボランティア部の部室のドアを開けて短めの髪を金色に染めた、細面の男子高校生とショートカット気味な髪にぱっちりとした大きな瞳が印象的な女子高生が入り口で鬼ごっこをしている二人を見て苦笑いしている

「ははは……相変わらずだね美緒先輩とタロー。」

苦笑いをしながら二人をみている女子高生――――――

名前は結野嵐子(ゆうの・あらしこ)俺達と同じクラスでかなりの美少女であるのだが。この子は男性恐怖症で男性が触ると物凄い攻撃をして相手を殺しかける。ちなみに兄は何度も経験済みだ

「はは、しょうがねぇよ。美緒先輩を止められるのは『みちる先生』だけだからな。」

そして嵐子の隣で苦笑いをしている金髪の男――――

コイツは葉山辰吉（はやま・たつきち）俺と兄の中学校からの腐れ縁で兄のマゾ体質を知っても友達でいてくれるとっても良い奴なんだが、女装好きで、女装をすると性格が女王様に変わってしまう

「何時ものことだ気にするな。」

俺の隣でさっきから美緒先輩をビデオで撮影している白衣を着た女性――――

名前を鬼瓦みちる（おにがわら・みちる）一応この学校の保健医であるのだが、この学校で一番の変人奇人であると俺は思う。ちなみにこの先生は美少女にコスプレをさせて写真を撮る趣味がある

「もらったぁ！」

「ポロオロゲェ！」

「あっ、美緒先輩のフルスイングが兄の頬にクリティカルヒットした。」

兄は気持ち悪い笑顔を浮かべながら部室の端っこまで吹っ飛ばされた

おっと、俺の自己紹介がまだだったな

俺は砂戸影久（さど・かげひさ）今気持ち悪い笑顔を浮かべながら吹っ飛ばされた砂戸太郎の双子の弟だ。ちなみに俺はM体質では無い。っていうかこの部活で唯一の普通の人間だ

「どうやらこの治療法は失敗のようね。」

美緒先輩は肩で息をしながら軽蔑の目で兄を見下ろした

「あひゃぁ！い、石動しぇんぱい！も、もっとこの醜い豚を叩いてくだふしゃいいいいい！！」

兄は発情した犬のように美緒先輩の脚にしがみつき呂律の回らない言葉で危ないセリフを連発していた

「あの顔は放送禁止だろ。」

俺は我が兄のアブナイ顔（舌をだらし無く出しながら恍惚の表情で美少女の脚にしがみつく）を見て正直家族の縁を切りたいと本気で思った

「このブタロウが！」

美緒先輩はしがみつく兄を蹴り飛ばし躊躇いなく兄の急所を――――全力で踏み潰した

グシャァ！

ご愁傷様です

これが我が第二ボランティア部のごくごく当たり前な日常です

第一話　第二ボランティア部

部室棟の一番端っこに存在する部屋――――

そこには石動美緒が部長を務める第二ボランティア部が存在する

そこで日夜、部長である石動美緒が生徒達の問題や悩み事を聞き解決するために日々奮闘中であるが、たいていの依頼者は酷い目にあうのだった

「ブタロウ！いい方法を思い付いたわ！」

「ええ！？」

もっとも最近は主に兄が犠牲者である

「今度こそアンタのマゾ体質を治してみせるわ！」

「い、石動先輩……そ、そのほ、砲丸はなんですか？」

美緒先輩は陸上で使う砲丸を脇に抱えながら兄との距離を徐々ににに縮めている

「何って決まってるじゃない♪ブタロウの治療に使う薬よ。」

美緒先輩は素敵な笑顔を浮かべながら砲丸を構え――――物凄い速度で投げた

ビューン！

ゴガァァン！

砲丸は兄の顔の横を通り過ぎ後ろのコンクリートにめり込んだ

ダラ、ダラ、

兄は冷や汗をかきながら、美緒先輩との距離をとり部室の入り口へと走って逃げた

「待ちなさいブタロウ！まだ治療は終わってないわよ！」

美緒先輩はコンクリートにめり込んだ砲丸を軽々と持ち上げ兄を追いかけた

「こっ！殺されるぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！？！！！！！？！！！！！」

兄は叫びながら部室を飛び出した

「本当になにやってんだか。」

俺は呆れながらその光景を安全な場所で見守っていた

第一話　第二ボランティア部

五月――桜も枯れ高校生活にも慣れはじめた頃、俺と兄と辰吉は自習の時間にたわいない話をして、まあ、初恋やら兄の妄想やらM体質をどうにかしないと彼女を作ることができないなどと話していると辰吉が――――

「第二ボランティア部ってところを頼ってみたらどうだ？」

「第二ボランティア部？第二？」

辰吉は小さく頷き

「そうだ。この学校にはボランティア部ってのが二つあってよ、一つめのボランティア部は学校近くの地域の清掃活動とか町内の福祉施設にお手伝いに行ったりとか、まあいわゆる普通のボランティア活動をしてるんだが、第二ボランティア部はそういうのじゃない活動をしてるらしんだ。」

「一体どんな活動をしてるんだよ？」

兄は首を傾げ、尋ねる

「桜守高校に通う生徒達の願いを叶えてあげる……というか、悩み相談みたいなというか……」

辰吉はちょっと説明に困っている

「は？願いを叶える？悩み相談？」

「俺もちょっと前に知り合いから聞いただけだから詳しくはしらねえけど、なんでもその第二ボランティア部では、部室に訪れた生徒たちのちょっとした願い事を叶えたり、悩み事の相談や懺悔などを聞いてくれる。それが活動の内容らしい。だから、もしおまえがドMを治すいい方法が見つからなくてどうしようもないほど困ってるんなら、そこを訪れてみるのも……って、なんだよその胡散臭そうなものを見るような顔は。」

「だってよぉ……」

正直胡散臭い……

「すげぇ胡散臭いじゃねえか。おい、それって有料とかじゃないよな？」

「学校の部活なんだから金なんかとるわけねえだろ……たぶん」

多分かよ！本当に大丈夫なのか？

「まあ。この桜守高校にはそんな珍しい部活もあるって話をしただけだよ。胡散臭いと思ったらいかなきゃいいだけだし」

「ふうん……第二ボランティア部ねぇ……」

この時、きっと兄、太郎の運命は決まったのだろう

放課後

俺は兄に引っ張られて部室棟まで足を運ぶことになった

「第二ボランティア部ねぇ……胡散臭えなぁ……」

「……だったら行かなきゃいいのに」

「まあ……ちょっとだけ覗いてみるかな。あくまで覗くだけだからな。」

兄はぶつぶつと独り言を呟いてから、部室棟のほうに歩いていった

第二ボランティア部は、部室棟の一番端っこにあった

「……ここか」

部室の扉の上に『第二ボランティア部』と書いてあるので、間違いないだろう

兄は恐る恐る扉に手をかけ、ゆっくりと扉を開けた

その瞬間――――

呼吸が止まった

十畳くらいの広さの部屋だった。中には机や椅子がいくつも置いてあり、壁際にはロッカーがある。部室の奥には戸口があり、その向こうにはどうやらもう一つ部屋があるようだった。

その部屋の真ん中辺り。

椅子に座り、文庫本を読む少女の姿があった。

淡い色をした長い髪がやわらかく両肩に落ち、その真珠色の肌は内側から光を当てられているかのようになめらか。二重の整った瞳。細い眉にすらっと通った鼻筋、小さな唇を加えたその顔の造形は、もはや崇めてしまいたくなるほどに美しい。

俺と兄は、目の前に現れた少女の完璧な美しさに、思わず息を止めてしまっていたのだ。

「あら？」

少女は優しげな微笑をたたえながら、細い首をかしげるようにして俺達を見つめた。さらり、と少女の長い髪が肩を滑る。

少女は文庫本を机の上に置くと、すっと椅子から立ち上がった。

「こんにちは。この第二ボランティア部に、なにかご用ですか？」

これが第二ボランティア部の部長、石動美緒と俺達のファーストコンタクトだった。

第二話　石動美緒と結野嵐子（前書き）

この小説の暗黙のルール

その一　基本的に影久は空気です。

その二　影久のボケは時間差でツッコまれます。

その三　　サブタイトルに意味はありません。

その四　私は基本的に原作をなぞるように書いて小説の書き方を勉強しています。

その五　途中でネタに走る可能性アリ。

その六　たまに文字数が極端に少ない時もあります。

その七　その時の気分によってころころと影久の性格が変わります。

第二話　石動美緒と結野嵐子

第二話　石動美緒と結野嵐子

「こんにちは。第二ボランティア部に、なにかご用ですか？」

「えっ？」

声をかけられ、兄はハッと我に返った

「あ、ええっと……あ、あの……」

美少女は穏やかな笑みを浮かべたまま、俺達のほうに歩み寄ってきた。

兄の前にぴたりと立ち止まり、少女はまっすぐ兄の目を見つめてくる。

再び呼吸が止まる。真横から見ても、その顔は怖いほどに完璧だった。いったい前世でどれほどの徳を積めばこんなに美しく生まれることができるのだろうか。

「もしかして……この第二ボランティア部になにか願い事か相談したいことがあって、わざわざ足を運んでくださったのですか？」

言って、少女はやわらかく笑った

その笑顔に誘われるように

「は、はい。じつは、そうなんです。俺の願いごとを叶えてほしくて、ここに……」

と、兄は顔を赤くしながら言った

「まあ、本当に？それは……とてもうれしいです」

くっ！凄い笑顔だ！

「あっ――あたし、まだ自己紹介をしてませんでしたね。ごめんなさい」

少女は言う。

「あたしは、石動美緒といいます。二年生で、この第二ボランティア部の部長をやっています」

「え……あなたが、第二ボランティア部の部長なんですか？」

美少女――――石動先輩は「はい」とうなずき、笑顔を広げる。

「あの……よろしければ、あなた達のお名前も教えていただけませんか？」

「あっ、はい。俺は砂戸太郎っていいます」

「俺はラウ・〇・クルーゼといいます」

「おい！？　影ひむぐぅ！？」

俺は余計なことを喋ろうとする兄の口を押さえ黙らせた

美緒先輩は、兄の名前を聞いてぱちぱちと何度もまばたきをした。

「砂戸太郎？　あなたが……砂戸太郎くんですか？」

「へ？　ああ、そうですけど」

「そうですか、あなたが……これは手間がはぶけたかも……」

美緒先輩は兄の顔をマジマジと眺め、しきりにうなずいてた。

っていうか俺のボケに無反応ですか……もしかして俺の名前聞いてなかったのか？

「あの…俺のこと知ってるんですか？」

「え？ああ、どうか気になさらないでください」

「はあ……」

兄と美緒先輩は俺を無視して話を進める

そのとき、背後にある部室の扉が開いた。俺と兄は反射的に振り返る。

「ひっ――――――！」

短く悲鳴を上げる人物。大きな瞳に怯えの色を宿し、身を引くよう

な体勢で俺達を見つめているその人は———結野だった。
クラスメイトであり、兄がドMに目覚めるきっかけを作った結野嵐子だ。
「なっ！」
兄はびっくりして派手にあとずさった。そして、小さな声でつぶやく。
「な、ななんで、結野がここに……？」
「砂戸くんは、嵐子さんとお知り合いなのですか？」
兄のつぶやきが聞こえたのだろうか、美緒先輩が言った
「嵐子さんは、この第二ボランティア部に部員なんですよ」
「「え……？」」
兄が驚きの目を結野に向けると、結野は激しく顔を歪ませた。そして俺達を避けるように大きく迂回しながら、じりじりと部室の中に入ってくる。近づいただけで変なウイルスにでも感染すると思っているような態度だった。
「嵐子さん。昨日は体調が悪くて学校をお休みしたのでしょう？あたし、とても心配しました。お体はもう大丈夫なんですか？」
「え？」

部室の中にある机の一つについた結野は、驚いたような顔で先輩を見る。

「ええ、わたしは大丈夫ですけど……み、美緒さんこそどうしたんですか？　だ，　大丈夫ですか？」

「え？　あたしはもちろん大丈夫ですよ。変なことを言う嵐子さんですね」

先輩は口に手を当て、くすくすと笑った。

「じゃあ……砂戸太郎くん。ラウ・〇・クルーゼくん。」

美緒先輩は俺達のほうに向き直り、言う。

「あなた達の願いごとというのがなんなのか、聞かせてください」

「「へ？」」

先輩は俺達の顔を見つめる

（やべぇ！？俺のボケをしんじてるよ！）

俺は内心ヒヤヒヤしながら、取り合えず

「いえ、願いがあるのは、俺の隣にいる兄だけです。」

「あら、そうなの？」

美緒先輩は兄のほうを見て尋ねる

「ええーっと、そうなんですが……それを言うんですか？いま、ここで？」

「はい。だって、願いごとの内容を教えていただけないと、それを叶えることなんてできないじゃないですか」

「え、いや、まあそうなんですけど……」

兄はちらりと結のほうに目をやった

結野は兄の視線に気づくと、びくりと大きく体を震わせ、素早く兄から目をそらした。

『こいつなんでわたしのほうを見てるの？やだ、すごくキモいよおっ』。そんな声が聞こえてきそうな振る舞い。

さすがにこの状況は俺でも兄に同情する

「どうしたのですか？」

「あ、あの……」

「はい」

「……やっぱり、いいです」

「え？」

兄は美緒先輩にくるりと背を向ける。

「あっ……お待ちになってください」

先輩の上品な声が追いかけてくる。兄はそれを無視して扉のほうに向かう。

（さすがに女の子二人に自分はマゾなんですって言えないよな。）

「お待ちになって。あの、ちょっと……」

背後から聞こえる美緒先輩の優しい声が、

「ちょっと、お待ちに……」

兄の背中に――――――

「ちょっと待てって……言ってんだろうがあぁあぁぁ――――――っっっ！」

強烈な勢いで叩きつけられた。

（マジで？）

突然の大音量に、兄はびくりと震える。そして。

後ろ襟を引っ張られ、がくん、と兄の体が急停止した。

そのまま、すごい力で後ろに吹っ飛ばされる。

「おげぇ！？」

兄は床に激突するような勢いで尻餅をつく。反動で揺れた頭部が机の角に思いっきりぶつかり、兄は呻きながら頭を抱えた。

「ぬ、ぬぐお！頭蓋骨が陥没するほどに痛いっ！」

（……見てるほうも痛いよ。）

そして、兄が顔を上げようとすると――――

スカートの中から伸びる、黒いニーソックスに包まれた細くしなやかな足が、天高く振り上げられていた。

その足の裏が兄に向かって振り下ろされる。その着地点は、床に尻餅をつく兄の股間部分……！

（砂戸太郎、第二ボランティア部の部室で男としての生涯を終える……さらば兄！俺は兄の生き様を後世に語り継ぐよ……！）

と、思ってたら、美緒先輩の足は兄の股間の少し前、床に投げ出された両足のあいだに置かれていた。

美緒先輩は――――兄を見下ろしてた。

聖母のような穏やかな微笑……は、すっかりと消え失せ、いまの美緒先輩は唾でも吐き出しそうなほど不機嫌な顔。

「え？あ、あれ？ええっと……」

「ええっとじゃねえわよ、このしょっぱい一年坊主が」

ふん、と傲慢そうな感じで鼻を鳴らし、長い髪をかき上げる。
先輩は偉そうに張った胸に、自分の右手を添えるような格好で、
「この美緒様が、あんなにも下手に出てやったつーのに、このボケ。声帯が潰れるまで詫びの言葉を吐けや」
「「……」」
これが本性ですか？正反対じゃないですか
「あっ。やっといつもの美緒さんに戻った」
と、結野が安心したような声で言ってくる。
「あー、すっごい肩こった」
先輩は右手で自分の肩をもみながら、結野のほうに顔を向ける。
「嵐子。あんたから借りてたあの本だけどさぁ」
ちらりと机の上の文庫本に目を向ける。
「貸してって言っといてなんだけど、やっぱあたしには無理だわ。なんか字が詰まりすぎてて読むのがしんどい。ハードル高すぎな感じっす。もうちょっとさ、読みやすい本を貸してくんない？ところどころ挿し絵が入ってたりすると、なおいい」
「あっ、はい。わかりました。じゃあ今度はそういう本を持ってき

ますね」

「うん、よろしく！」

言ってから、美緒しぇんぱいは再び兄のほうに目を向けてきた

ため息をついてから、両手を腰に当て目つきを鋭くする。

「……やれやれ」

チッと露骨に舌打ちし、

「清純で上品な感じにしてりゃあ、学校に入ってきたばかりの一年坊主はコロッとだまされて、アホみたいに願いごとを垂れ流すと思ったのに。そんで、清楚な石動先輩の噂が一年生のあいだで広まり、そんな麗しい先輩に願いごとを叶えてほしいと思った一年が第二ボランティア部に押し寄せてくる……という計画が、昨日に続いて今日も失敗に終わったわ。ムカつく。まったく———ああ、慣れない敬語なんて使ったからすげえイライラするんだけどっ！」

言って、じろりと兄を睨みつけた。

「あやまりなさいよ」

「へ？」

「とりあえず、あやまりなさいよ。心を込めて謝罪しなさい」

傲慢に、言い放つ。

「あ、あやまれって……お、俺は別に悪いことはなにも……」

「ねえ、聞こえてたでしょ？美緒様が、あやまれって言ってるのよ？」

「……」

すごい女王様だ！開いた口が塞がらないよ。

「ご、ごめんなさいっ！申し訳ありませんでしたぁ！」

あやまったよ！？このバカ兄あやまったよ！

「ふんっ。それでいいのよ、このクズが。――――ん？」

美緒先輩はずいっと兄に顔を近づける。

「あんた……なんで息を荒げてるの？はあはあ言って気持ち悪いんだけど」

ヤバッ！？兄の発作が始まった！

「はあ、はあ、はあ……え？」

「ふん、なんかキモいわねこいつ……まあ、いいわ」

美緒先輩は両腕を組み、細い顎をくいっと上げ、兄を見下ろす。

「とりあえず、最初の話の続きをしましょう」

「へ？　さ、最初の話って……」

「あんたの願いごとの話よ。あんたはなにかお願いしたいことがあって、この第二ボランティア部にきた。最初にそう言ったでしょ？」

「え？ええ……」

「その願いごとを言いなさい。あたしが叶えてあげるから」

「は？い、いや、それはもういいですとさっき言――――」

「おい」

「あたしだって、あんたみたいなゴミの願いごとなんて叶えるのはめんどくさくて嫌なんだけど、これも神様の仕事だからしょうがないのよ」

「神様の……仕事？」

「そうよ。だから、あたしがあんたの願いごとをちゃんと叶えてあげる。神様であるこのあたしがね。わかったら、さっさと願いごとを言いなさい」

「……」

俺には、もう理解不能です

美緒先輩は兄の前にしゃがみ込み、右手で兄の頬をがっと挟んだ。

「ほら、さっさと言えよ、このノロマ野郎」

「あ、あぅ……」
兄のだらし無い声が聞こえる。
「はあ、はあ、はあ……」
兄はもう駄目だ……置いて帰ろうかな。
「わ、わかりましたよっ！言います！願いごとを言いますから！」
「そうそう。最初から素直にそう言えばよかったのよ」
一転、機嫌をよくした美緒先輩は、
「えらいえらい。ご褒美に撫でてあげる」
俺は空気です……
「じゃあ言いなさい。あんたの願いごとを」
「は、はい……」
兄はため息をつきながら、
「あ、あのですね……願いというのは……」
「うん」
「ええっと、なんというかですか、俺のある特殊な体質を改善してほしいというか……」

そこで、兄から目を反らし続ける結野の肩がぴくっと震えた。

（あの時のことを思い出したのかな？）

「特殊な体質？なによそれは？」

「はあ、はあ。それはですね……っ、つまり、その……マゾヒズム……」

兄はついに打ち明けた

「は？まぞひずむ？」

当然そんな単語を知らない美緒先輩は、兄に聞き返す。

「は、はい。お、俺はマゾヒズム――――ドM体質なんです……で、でも、自分ではそれがすごく嫌で、だからここにお願いして……」

「ちょっと待って。ドM体質ってなあに？まったく意味がわからないんだけど。もっとわかりやすく言いなさいよ」

と、美緒先輩は首をかしげる。

「ええっと、つまり……」

まあ、説明しにくよな。っていうか自分の変態体質を人に説明するのはすごく屈辱的だと思う。

「つ、つ、つまり、つまりつまり……はあ、はあ、はあ……

…」

兄は今、興奮している……

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあはあはあはあはあ……」

「ど、どうしたの？なんか呼吸音が尋常じゃないくらい速くなってるんだけど……」

「だ、大丈夫ですっ！ええ、大丈夫ですともっ！」

「そ、そうなの……なんか目も血走ってきて、まったく大丈夫そうじゃないというか怖いというかキモいというか……」

嗚呼、兄はもう限界だ……

兄はくわっと目を見開き、絶叫するように言った。

「じ、じつはですね！俺という人間はですね！女性に罵られたり冷たくされたり殴られたりすると、すごく体が気持ちよくなっちゃう人間なんですよ！も、もう、我を忘れるぐらいに気持ちよくなってしまって、はあはあはあ……マジやばいんですよ！俺はやぁばい奴ぬぁんですよぉ！」

兄は美緒先輩の両肩をぐわしっと掴んだ。美緒先輩はぎょっとした顔で兄を見上げる。

「ふ、ふふふ普通なら、罵られたり冷たくされたり殴られたりするとすごく嫌じゃないですかっ！？で、でも、俺は違うんだよ！逆なんだよ！気持ちよくなっちゃうんだよ！変態なんだよ！ド変態なんだよ！それが俺の言うドＭ体質ってやつなんだぁ！そ、そ、そんな

体質が嫌だから、こ、ここにお願いしにきたんだよっ！」

「ち、ちょ――――ちょっと落ち着け！こ、興奮しすぎよ！」

さすがにあの状態の兄は美緒先輩でも対処でき……

「落ち着けと……」

「はあ、はあ、はあ……」

「言ってるだろうがあぁぁぁ――――――っっ！」

できたな……美緒先輩の足が兄の顎を貫いたよ。

「ぶ、ぶべらっ！？」

兄は派手に吹っ飛んだが――――

「あは、あはははははあはあっっはあああっはあ」

火に油だったようだな。

「あははっは……うううううう……」

兄は狂ったように笑いながら、泣いていた。

第三話　ドＳとドＭ

第三話　ドＳとドＭ

「なるほど。話はわかったわ」

行儀悪く机の上に座り、腕組みしながら兄の話を聞いていた美緒先輩は、最後にそう言ってうなずいた。

「あんたは、女性に罵られたり冷たくされたり殴られたりすると、過度に興奮してしまう体質の持ち主なのね。自分ではコントロールできなくなるくらいに。そして、そんな自分が嫌でしょうがなくて、普通の人間になりたくて、藁にもすがる気持ちでこの第二ボランティア部にやってきたというわけか……」

「はい。だいたいそんな感じです」

「ふうん、そう……ドＭ体質ねぇ……」

言って、美緒先輩は顔を隠すようにうつむく、その体は少し震えているように見えた。

（ありゃ、笑うのをこらえてるな）

「ぷっ！ぶははっ！なにそれ！ドＭ体質だって！お、おもしろすぎるわよその体質っ！ぎゃはははははっ！」

「……」

美緒先輩は大爆笑しながら、部室の床をごろごろ転がりはじめた。

「み、美緒さん！そんなことすると制服が汚れちゃいますよっ！」

「あ、嵐子！あんたももっと笑いなさいっ！こんな珍妙な生物、滅多に拝めるもんじゃないわよっ！あはははははははっ！」

「……」

それからしばらくして――――――

ようやくバカ笑いを停止させた美緒先輩は、ゆっくりと床から立ち上がった。その傍らに近づいた結野が、先輩の制服の汚れをぱんぱんと手で払ってあげていた。

「ふうん、ドM体質かぁ――――――」

美緒先輩はにやにやしながら兄に近づき、

「じゃあ、もしかして、さっきあたしがあやまれって言ったときとか、ひどい言葉で罵ってたときとかも、あんたはMな快楽を感じて内心よろこんでたの？」

「う……」

（哀れ……きっとこの人と出会った時から兄の運命は決まってたんだな……）

「あは、やっぱりそうなんだぁ……じゃあなに？あんたは、この美

緒様を、自分が気持ちよくなりための道具として利用したってわけ？」

「ち、ちが……」

「うっわ、キモいっ。あんたって本当にいやらしいのね。このくされド変態」

美緒先輩は左手で兄の紙を乱暴に掴み、右手でぺちぺちと兄の頬を軽く叩いた。

「あ、あう、あうあうあう……」

「あうあううるせーのよ、この変態暴走特急が。あんたみたいなブタが存在してるから、いつまでたっても世の中は平和にならないのよ。あんたもそう思うでしょ？」

「あう……そ、そう思いますぅ……はあ、はあ、はあ……」

駄目だコイツ等！これは完全にSとMなプレイだ！

「そう思うなら、もう一度あやまりなさい。誠心誠意、心を込めて、自分みたいなブタが生まれてきてしまったことを世の中にあやまりなさいよ」

「はいぃぃぃぃ！あやまりますぅ！」

誰かコイツ等を止めてくれ！

「ごめんなさいっ！生まれてきてごめんなさいっ！」

「声が小さいわよっ！もっと腹から声を出しなさい、このブタロウがっ！」

「イエッサー！すみませんでしたあぁあぁっ！俺みたいなウジ虫が生まれてきてすみませんでしたぁあぁーーっ！」

兄よ……あんたはもうダメだ。

「うぷっ」

美緒先輩は指をそろえた右手を口の前に当て、吹き出した。

「うぷ、うぷぷっ。見たっ！？嵐子いまの見たっ！？こいつ、本当にあやまりやがったわよっ！？生まれてきてすみませんって！し、しかも、あんなうれしそうな顔で！」

近くにいる結野のほうを見て、美緒先輩は笑いながらぱんぱんと膝を叩く。

「こいつ本物だわっ！真性のマゾ野郎だわっ！あはははははっ！」

「ドSだ。この人、ドSだよ……」

俺はつい本音を漏らしてしまった。

「あー、おもしろかった。……さてさて」

美緒先輩は笑いを引っ込め――――まだ口元はにやにやしていたが

――――俺のほうを見て、

「ええっと、あんた、ク〇ーゼだっけ？っていうかあんたあのブタの弟なのにその名前はないっしょ。……まあ、どうでもいいわ、あんたはこのブタみたいな、変態な体質はないの？」

「いえ、俺にはそんな変態チックな体質はありませんよ。あと、俺の本当の名前は砂戸影久です。」

美緒先輩はつまらなそうな顔で、

「ああ、そう。じゃあいいわ。本当ならあたしに嘘をついた罰を与えるところだけど、このブタロウのキモさにめんじて許してあげる」

美緒先輩は俺に興味をなくしたのか、兄のほうに向き直った。

「こんな変態の願いごとでも、神様のあたしは叶えないといけないのよねー。ほんっと、やれやれだわ」

ふひー、とため息をつく。

「まあいいや。――――あんたの願いごと、確かに受け取ったわ。だから、あんたの願いごとはこのあたしが叶えてあげる。絶対にね」

「は、はあ……でも、具体的にどうやって治す気なんですか？」

「うむむ」

美緒先輩は腕組みをし、難しい顔で唸る。

「いますぐにはいい方法は浮かばないわね……こんなアホみたいな相談、過去に前例がないし。まあでも大丈夫よ。明日までにはなんかいい方法を考えておくから。とりあえず今日は帰って、また明日この部室に顔を出しなさい」

……大丈夫なのだろうか？

「なあに、その顔は？あんたまさか、この美緒様が信じられないってーの？」

ギンッと、睨みつけてくる

「い、いえ、そんなことは……じゃあ、とりあえず明日またきますんで……」

「ふんっ。素直にそう言えばいいのよ、薄汚いブタ野郎が」

「ブタ野郎って……俺は別に肥満体質じゃないし……」

「あ？なに言ってんのよ。ブタ野郎ってのは、太ってる人間をバカにする言葉じゃないわ。それは家畜以下のどうしようもないゴミ存在に与えられる称号よ。つまりブタ野郎という言葉はあんたみたいな究極変態を表す観念にも似た罵詈雑言であるということなのよ。わかったか、このブタ野郎」

「ぐ、ううう……」

兄は悔しそうな、でも、うれしそうな顔……恍惚だな。

「さ、さすがですね石動先輩。だてにサディストを名乗ってってる

わけではないということですか……」

「誰もそんなものを名乗った覚えはないわよ。キモいこと言うな」

美緒先輩は兄を侮蔑するような目で見る。

「まあいいわ。とにかく、明日、絶対に来なさいよ。絶対にっ。……願いごとのほかにも、あんたたちにはまだ別の用事があるんだからね」

「別の用事って……俺もですか？」

俺は、聞き返した。

「そう、あんたもよ。絶対にきなさい！」

「「はあ」」

俺と兄は気の抜けた返事をした。

「あ、あの、俺の願いごとのことは、誰にも……」

「わかってるわよ。あんたの体質のことは誰にも言わない。部員や関係者以外にはね。一応、あたしたちも守秘義務というものはわきまえてるわよ」

「そ、そうですか……」

「なあに？もしかして、言いふらしてもらいたいいの？それなら遠慮なく……」

「ち、違いますよ！やめてくださいっ！」

「ふんっ、冗談よ」

嘲りの笑みを浮かべる美緒先輩と、憎悪の表情を向ける結野に見送られながら、俺達は部室を出ていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7677l/

えむえむっ！〜M体質な兄と苦悩する弟〜

2010年12月13日10時07分発行